

【巻頭言】

読書生活の充実

校長 永田 彰浩

令和時代がやってきました。時代のキーワードは「変化」です。今年はオリンピックイヤーでもあり、これから五輪開催に向けた総仕上げが急ピッチで進められます。また、今年から、次世代通信規格「5G」の本格的なサービスが日本でもスタートします。今後、情報社会は加速度的に変化していきます。更に、スマート社会の実現を目指す「Society5.0」の進展に伴い、人々の生活は劇的に変化するだろうとも言われています。今後、激変する世の中はますます流動的で不透明になり、混迷の色合いが濃くなっていくに違いありません。

「混迷の時代」においては、世の中を生き抜く力として読書による「インプット力」と「アウトプット力」の重要性がますます増してきます。一方で若者の読書離れが指摘される中、社会生活を営む上での読書の必要性については、これまでも度々論じられてきました。

現代人にとって、読書ほど必要不可欠なものはない、といっても過言ではありません。読書は自分を磨き、豊かに生きていく力を与えてくれるのです。（齋藤孝『読書の全技術』）

また、現代の若者たちの国語力の低下を嘆く声も学校や会社など多方面から聞こえてきます。経済協力開発機構（OECD）2018年国際学習到達度調査（PIISA）の結果によると、日本の高校一年生の読解力は、加盟国を含む七十九ヶ国・地域中第十五位で、八位だった前回調査から二回連続で低下しました。その要因として、読書を通じて正しい日本語に触れる機会が減っていること、スマートフォン等のSNSの普及によって子供たちの読み書きやコミュニケーションが短文中心になっていること等があげられています。

このように現代社会において読書生活が見直される中、自らの読書生活が豊かで潤いのあるものになれば、どんなに素晴らしいことでしょうか。本の中には仕事や生きる上でたいへん役に立つ知恵（教養）がびっしり詰まっています。読書によって、それらの教養が私たちの脳裏にどんどん「インプット」されていきます。そして、困難に出会った時、利用価値の高い先人たちの知恵を上手く活用して「アウトプット」できれば、たとえそれが難しい課題であったとしても克服し、夢の実現に大きく前進できるに違いありません。

